

「タイ・フィールド調査参加報告書」

京都大学農学研究科修士課程2年 神崎舞

①学習成果

私は「留学」や「海外経験を積む」ことそのものに興味があったわけではない。むしろ、できれば日本から出たくないと思っていた。しかし偶然今回自分の研究と関連する派遣プログラムがあることを知り、大学のプログラムとしてグループで渡航するということの安心感、費用負担が軽くハードルが低いことから参加を決めた。

実際に海外で学習して感じたことは、新しい土地に足を踏み入れていろんな経験をし見える世界が広がることは国内も海外もそんなに変わらないということだ。もちろん、だから国内でいいという意味ではない。国内にも知らない土地の知らない人の知らない生活や文化があり、海外にもまた然り。「日本」のどこかに行くことと「海外」のどこかに行くこと、その決定的な差は言語だけだと思うようになった。

②海外での経験

これまでの海外経験は、個人的な旅行でフィリピンに1週間行ったことがあるだけだった。それゆえ、海外で学習すること、またそもそも2週間近く海外に滞在すること自体が初めての経験だった。よって、参加するまでは、海外で滞在すること自体が不安であった。また、プログラム中に自身の研究報告が含まれていたが、英語での研究報告は初めてだったため、その準備の過程において、英語での資料作成。

今回の派遣プログラムで得たことは、「海外に行く」ことはそこまで肩肘張る必要があるわけではないこと、お互いに共通の言語が完璧に話せなくても意思疎通は可能である事、しかしさらに深く理解するにはより語学力が必要と分かったことだ。

③プログラム内容

Study trip が多く組み込まれていたため、タイの社会の生の情報に触れることができた。またバンコクだけではなく後半プーケットに滞在したことが経験に深みをもたらしたと思う。ビーチリゾートで有名なプーケットであえてビーチではないところに行けたのが面白かった。

講義はタイの経済発展、ひいてはASEAN地域の発展に関わるもの、もしくは日本とタイの繋がりを意識したものが多かったが、もう少し様々な視点からタイそのものの文化や社会に関して学ぶことができればよりよいと感じた。

④進路への影響

今回の派遣プログラムをきっかけに海外での研究や就職に興味をもつようになったかどうかと問われるのであれば、それにはいとは答えられない。

しかし今後もし国際学会など海外で研究発表をする機会があるならば、チャレンジが容易になったと思う。

進路に関しては迷い初めていたところでもあり、初めは進学を考えていたが、今回の派遣で自分の研究を離れて新しい経験をし、さまざまな人の生き方に触れるうちに、一旦リセットして考えることができるようになった。